寄書

始ての寫生

後藤 階 奇

新たに文房堂で買て來たばかりのスケツチ箱を肩にかけて三脚をリユウノと振りまはして天下の畫伯オレ一人と言はぬばかりの顔をして寫生に出かけようと思したのは昨日の考へであつた。さて出て見ると昨日の勢は何處へやら、何だか耻かしい様な氣がする、然し何となく嬉しく思はれぬでもない、僕が出る時姉が「でも道具を持たつが嬉しいと見えてにこ／＼して居ます」と小さい聲で母上に語られた。僕は少しムツとした。が其の中にも少しは嬉しい様な氣も含まれていた。僕は歩みながら、頗りに姉上のさつきの言葉を連發した。

空には一點の雲なき迄も晴れ渡っている。いつか八重洲橋を渡つて少しは眺めのよい所へ出た、此所らでよからうと道具をおろした。僕は人が居なかつたから其處にきめたのだ。

僕はこういう事を考へていた。定めし繪をかく時は人が澤山に集てくるだらう、そして中にはけなす人もあるであらう、或は僕の様な繪でもほめてくれる人もあるかもしれない、そして僕は顔を赤くするだらうと思つた處が、案の條一人たり二人たり、遂には何處から來たともなく僕のまはりには黒山の人となつた、然し僕は繪に熱心になつていたので、人がたかつても赤い顔もしなかつた。僕はうまい都合に出來て居るものかわいと思つた。そつういふ都合だから、人が僕の繪を色々に云っているのも

耳にはいらなかつた。然したゞ幼い小供か「やアきれいな繪だな」「ウマイね」といつたのをおぼへて居る、でもさすがにそういはれると何だか鼻が高くなる様な氣がした。然し其の鼻の高さはいつ迄も續かなかつた。ふと向を見ると五六人の書生が來た、僕は書生と見てあまりなぶらなければいゝがなと思つた。「實際なんだな、僕は始めて寫生に出かけた時くらい、いやだつた事はなかつたな」と一人が言つた「それも上手ならいゝがね、からなつていないときているだらう……」僕はからなつていないといふ言葉が或は僕をさしたのではあるまいかと思つた、そして次の瞬間には思はず顔に紅葉をちらした。暫く筆をおいて休む。ばた／＼といふ騒がしい音がする、振りかへつて見ると五六人の小供が來たのだ「やア寫生している」づか／＼と僕の傍へよつてくる「きれいだね」「うまいね」「やつぱり鉛筆で先きへかへておくのだね」中でも一人は紙をじろ／＼眺めて「ヤア之はあれだらうそら學校に賣つている一錢の畫用紙だらうね?! 吉ちゃん」と無邪氣な事をいふ。可愛そうにこれでもワツトマンだぞと腹の中できげんで思はず吹き出した。三時間餘にして繪は出來上つた、まだ外に寫す處もあつたが家へ歸つて一度折れた鼻を一番うんと高くしてやるうと、そこそこにしまつて仕舞つた。

峠屋

紀州 長谷川 利行

△夕榮七彩がまげゆう樹から木へ洩れそれが前の小川にとつぷ

り暮れて終ふと、どこやらの遠い遠い晩鐘が餘韻を齎らす、お茂さんは「まあ今日は見事なのを三枚もおかきになつてーホ、ホ」實際私は朝早くから夕暮までに懸けての水彩畫を描くのは三枚以上どうしても作られ無かつた、勿論或日は一枚もなく消沈して歸る時もあった、何時でも黄昏假宿のお茂さんの家へ歸るとお飯をもつて来て下さつての挨拶はきつと製作を見ての言葉で盡された、私もそれを非常に嬉しく思つた。

△お茂さんの家へ来たのは今年の冬休から一月六日學校が初まるまで二週間程居つた。

△十二三戸の人家があるばかりで酒屋へ六里豆腐屋へ六里と云ふ山奥で、狼の聲は聞えぬけれど猪は出沒する所、山間のことまして山の奥の山腹にあるのだから家屋は低くて五尺の私でさへ起居に少々困難を感じた。

△冬のことだから溪流の畔は枝ぶりのよい寒林、山には杉が繁茂してゐる、總て景色は雄大で無いかはり小部分の畫材に富んでゐて、私の様な幼稚な水彩畫研究者には適した地と思つた、この十二三戸の孤村、尾瀬沼の様な所で無ければ紀州にしては美しい自然を持つた土地と云ひたい。

△お茂さん！ 峠屋と云ふ名よりも深い印象を止めた、人がよくて親切で言葉が明かて豆やかで歳は廿七、生れて未だ町へ出たことが無い山猿といへ顔が美しいのと開けて居つたのは嬉しい。

△眞黒な着衣！ お茂さんの平常着で、私が目を醒す時、寝る

時、低い戸を操つたり開けたりして、お茂さん流の畫評を寢床に居つて聞くのが面白かつた、夕榮の山の畫を見て山火事、朝の村を見て夕方ですか等は振つたものだった、お茂さんの齒は黒く染められて、丸顔でデブデブふとつた體、それを軽く大きな尻をふつて私の爲に働いて下さつたは感謝する。

△私は瓢然この村に辿つて計らず氣に入つて、二週間の畫筆生活を、而かも愉快に快活に何の不平も無く幸福に暮し新天地を迎えた。

△溪に望んで寫生をし居ると風が烈しくなつて畫架の脚を二本まで折り帽子を峯の松に飛ばしたり、猪が出たと云はれて道具を捨て、逃げた樂天的の事件に遇ふたこと、お茂さんが寒い或晩ソツト蒲團をかけてくれた事實もあつて、最初の計畫？ 水彩畫の寫生よりもズツト楽しい事もあつた、僅か大小二十餘枚の寫生を得たばかりであるが愉快で愉快で堪らない。

△峠屋村へ行く一番徑路は有田川の上流江瀬と云ふ所から堤に沿ふて行けば、少々困難だが行ける、本道は金屋から大和に入る縣道を通つて行くのである、私が居る廣村からは十二里ある。

○峠屋は攝津の六甲山の半分位の高さでそれが爲井戸が深くて水をくむのに餘程時間がかかる○猪の副食物は一週間以上食つた○食料は一日廿錢の割で不自由は無かつた○村人は私を學生とは思つてくれなから飛んだもてなしをしてくれた○二日に一回郵便が來てその郵便さんに出す郵便を持つて歸つてもらはないと一里程下の村まで入れに行かねばならぬ

○私は大得意で何にも知らぬ村人の爲めに展覽會を開いた、是は生れて以來單獨の展覽會として有名なものならん○紀念の爲に繪を惠んでやつたら大切に持つて歸つた人もあつた○私は斯な山奥に名を知られたのを非常に嬉しいと思つた○水彩畫の研究を始めてから日が淺いけれど兎に角描くことの出来るやうになつたのについては春鳥會、つづいて大下先生に御禮を申さればならぬ○峠屋の村長さんは中學世界の口繪で知つたのか大下先生の名を知つてゐた。

水彩畫史及所感

東城町

田 吾 作

私が水彩畫の趣味を知たのは四五年前で、其端緒は七年前學校で一年許り兒戯に均しいことを習て水彩畫なるものを知た、其の後數年更に顧みなかつたが其後友人の筆になれるものを見て畫の趣味あることを知り一度畫筆を手にとると繪具及用品を調べ試み而て其色彩の容易にあらざるに於て失望した、其後は臨本寫生に、不完全の野外寫生に數十葉を試み、如何にして友人は斯くの如き色彩を得しかと數十回の殆ど失敗に終れると其色調の輕易に得られざるを知るに共に余の水彩熱も已に挫折せんとせり、是の際一つの興奮劑を得た、即ち一葉の繪葉書は旅行先の親友T H 君より投ぜられたるもの、其畫のT H 君の筆になれるを知り、其色彩の高尙なるに驚き、斷念か中止の點は翻て奮發心となり、直に水彩畫の葉を求め默讀數回大に得るところあり、又模寫に寫生に數十葉を筆にせり、然れども其三四を除

くの外は全く見るべきものなし依て心に思へりこれ必ず使用品の悪しきためならんと、而して自己の手腕如何には充分思及ざりき、この思は暫時にして足れり即ち用品は不足なく整ひたり、直に試み見事失敗せり、斯くしてこそ眞く畫の趣味も知るを得べく自然の大景にも亦親むを得べく、畫趣なき人の想像だに能はざる眞味も亦解するに至るべし、然れども、もと水彩畫専門を以て世に立たん決心もなく、其高尙なる、其究りなき自然の彩色に師事し、以て心身の高潔を得んがためなり、故に其進歩の如きもまことに微々たるをまぬがれず、然れども、健忍不拔以て進まば半歩の遅々尙ほよく彼岸に達するのときあらん、たとへ其進歩は遅々たるも其精神的有形無形の効果に至りては枚擧するに遑あらず、まことに大下畫伯の言はれしごとく直覺的には心神の高潔健康の増進等其無形の効果に至ては頗る大なるならん、是れ田吾作と共に實地、諸君の認識せられしことならんと信ず、されど我作品に至ては依然として兒戯の域を脱せず自ら苦笑しつゝあり。

我が寫生

佐藤 秋 湖

△「みづゑ」を購讀し初めたのは去年の一月からで、之れからは早く寫生の人となりたいたいと云ふ念が絶えませんでした、尤も其の以前にも不正確な鉛筆寫生をやつて居りましたが、尙ほ黑繪の素養が必要とのお話から七八月迄繼續して居りました、然し遂に堪え切れなくなつて半ば手製に半ば買立と云ふ不完全な道